

甌島調査報告

甌島里町「地方嫁」と婦人会活動

謝 陽

はじめに

甌島は鹿児島県旧薩摩郡里村・上甌村・鹿島村・下甌村の全域を指しているが、平成16年10月に、川内市、樋脇町、入来町、東郷町、祁答院町、里村、上甌村、下甌村、鹿島村が合併して、「薩摩川内市」となった。今回の甌島調査で筆者は主に上甌島里町（旧里村）の「地方嫁」（じかたよめ）の問題と地元婦人会の活動をめぐって、聞き取り調査を行ってきた。

離島の特性として、本土から遠く離れていること（隔絶性）、海によって囲まれていること（環海性）のほかに、土地面積の狭小性が指摘されている。離島は、第二次世界後の引揚げやベビーブームなどによる一時的な人口急増を経た後、その多くは人口減少に転じた。特に、1960年代からの高度経済成長期に激しい人口流出を経験し、過疎地域が出現した。その後、オイルショックを経て安定経済成長期になり、ようやく人口流出の傾向が緩めたが、現在でも若年層の減少、嫁不足、出生率の低下、高齢者の増加などは続いている。

甌島では、従来の産業として農業、水産業の第一産業が島の経済を支えてきたが、農漁業の不振のため、出稼ぎ者、離村者が多い。第二産業は、建設業が漁港や道路整備その他の建設工事で活況を呈している。比較的近海に位置するのに、後進性は顕著で、文化・生活の水準も低く、青年層の出稼ぎ者は多く、離島振興の推進が要望されている地域であった。今日、里町では、人口の自然減少とあいまって、青年労働力流出も進んでおり、高齢化は一層深刻化している。その背景には、嫁不足の問題がある。若い女性の流出の増加と流入の少なさが、高い未婚率、ひいては少子化の一因になるといえよう。嫁不足が改善されなければ、人口流出に拍車をかけることになる。里町では、島の外から嫁いで来た女性のことを「地方嫁」と呼んでいる。近年、こういう「地方嫁」が多くなってきて、地元で新しい課題をもたらした。地方嫁

は里町に来てどう受け入れられ、どのような体験してきたのか、また、嫁の問題について何の要素が働き、「地方嫁」の地域にとっての意味、などが今回筆者の関心である。

調査は、主に聞き取り調査とし、「地方嫁」の方二人と元婦人会会長に、詳しく話を伺った。

里町支所における調査

里支所から頂いた資料によれば、里町の人口は平成18年6月1日現在、男性710名、女性718名の合計1,428名であり、世帯数は649戸である。このうち、高齢者（65歳以上）は565名で、高齢化率は38.4%となっている。15～19歳の人口は、男女とも極めて少ない。この原因は、甌島内に高等学校が設置されておらず、多くが島外の学校へ進学するためである。

高度成長期には、従来どおりに農業や漁業だけで生計を立てることが困難であったため、中学校を卒業した子どもたちは、ほとんどが島外での生活を選び、島に戻らなかった。また、家族で本土へ移住する人も多くなり、昭和48年以降、人口が減少し始めた。昭和50年代の不景気な時期には、IターンやUターンで島に戻る人が増えたが、人口の減少は相変わらず続いている。現在の人口減は、社会減少より自然減少の方が多い。

いったん島を出て、数年後に戻ってくるというUターンのパターンは男性に多い。女性の移住者は、嫁いで来る場合がほとんどである。流出の人口にも、男性の出稼ぎと異なって、女性の縁事移動も含まれると考えられる。移住者の中には、若者のほかに、定年退職者もいる。移住者の多くは、建設業、医療関係、漁業などに携わっている。女性は、専業主婦が少なく、主に看護婦、販売、水産加工などの職についている。

Uターンの人たちにとっては、就職口があるかどうか、もっとも重要な問題であるが、もう一つ重要な問題が住居である。Iターンの人は高齢者が多いが、死ぬまで里町にいるつもりはないようで、賃貸住宅を希望する人が多い。私営住宅、

表1. 里地域男女別従業者数

市区町村	従業者数							
	平成16年		平成13年		平成13～16年			
里町	総数	492	総数	386	増加数	106	増加率 (%)	27.5
	男	276	男	231	男	45	男	19.5
	女	216	女	155	女	61	女	39.4

(里支所資料による)

表2. 平成16年度里地域産業別従業者数*

市区町村及び産業大分類	事業所数	従業者数		
		総数	男	女
里町				
全産業	101	492	276	216
非農林漁業	101	492	276	216
建設業	22	154	131	23
製造業	10	53	26	27
情報通信業	1	5	3	2
運輸業	5	18	12	6
卸売・小売業	29	110	52	58
飲食店・宿泊業	12	58	15	43
医療・福祉	2	34	7	27
複合サービス事業	2	28	14	14
サービス業 (他に分類されないもの)	17	31	16	15

(里支所資料による)

民間家借り、空き家を紹介するなどの定住対策が里町により行われている。

表1からみると、里地域の人口減にもかかわらず、平成13年から平成16年まで従業者数が増加している。そのうち、女性の増加数が男性を上回っている。男女の格差は13年度の76人から16年度の60人に縮小している。人口再生産力に影響を与える人口の流出・流入は、転入率が高いが、転出率がよりいっそう高く、その大部分は若い生産年齢人口と推察される。

産業別にみると、表2に示されたとおり、建設業における従業者の割合が最も高く、それに次ぐのが卸売・小売業である。男性の場合は、建設業に従事する人数が多く、全体の半分近くを占めている。女性の場合は、卸売・小売業と飲食・宿泊業に比較的に集中している。男女を比べると、建設業と運輸業において男性が女性より多いが、飲

食店・宿泊業、医療・福祉業と卸売・小売業においては女性が男性より多い。建設業の規模と人数からいうと、公共事業が今も昔も雇用対策として大きな役割を果たすと考えている。また、高齢化に伴う介護の必要性が重要視され、早くから高齢者介護への取り組みが実施されてきた背景があって、医療・福祉では、事業所数は多くないが、女性従業者の吸収に大いに貢献している。

里地域婦人会

里地域婦人会は、地元の既婚女性のコミュニティとして、主な役割を果たしてきた。その目標は、「激しく揺れ動く社会情勢の中で、婦人の地位向上と婦人白らの幸せはもとより家庭生活の充実を図り、健康で心豊かな村づくりを目指して活動を展開する」というものである。平成17年4月に合併後の里地区コミュニティ協議会が設立し、今

* 第一次産業をのぞき、第二次、第三次産業を指す。また、従業者数0の産業が含まれない。

表3. 里地域婦人会構成会員数

	20代	30代	40代	50代	合計
藪上	1	6	18	24	49
藪中	1	3	12	13	29
藪下		6	16	16	38
村西		12	7	15	34
村東		4	14	22	40
合計	2	31	67	90	190

(平成17年度里地域婦人会総会資料より)

まであった里町の様々なコミュニティを行政の中に明確に組み込む形でまとめたという。その中に、婦人会をはじめ、あらゆる里町の団体が含まれている。婦人会は村東地区、村西地区、藪上地区、藪中地区、藪下地区の地域区分に従って5つの支部が存在している。これらの支部は、それぞれの活動計画、目標を持ち、地区ごとに活動している。平成17年度のデータでは、地区別の会員数は表3の通りである。

婦人会は20代から50代までの会員（60歳になると退会する）により構成されている。年代別構成からみると、50代の割合が最も高く、20代が最も少ない。村西以外の地域では年齢層が若いほど参加人数が少なくなる傾向を示している。婦人会には高齢化と人員減少が顕著であることが分かる。その背景として、里町人口の全体的高齢化と減少がうかがえる。一方、20代の人数が極端に少ないことから、若い世代が婦人会への参加に積極ではない、あるいは、若い世代の嫁不足の問題が深刻していると推測できるだろう。

平成17年度の収支決算書及び平成18年度の予算案では、薩摩川内市からの補助金が400,000円である。収入源をみると、助成金（補助金）と事業収入（物品販売など）が大きい比例を占めている。

活動内容については、17年度の活動経過と18年度の活動計画をみると、女性自身のための活動だけでなく、スポーツ・文化関連行事、環境美化活動、交通安全宣伝運動、青少年育成、高齢者への奉仕など、地域社会の各方面と深く関わっている。里町では、地域ごとの結束が強く、伝統行事などの出席率も高いといわれている。

Aさんへの聞き取り

Aさん（女性）は今年70歳で、すでに里町に三十年間住んでいる。子供が二人おり、一人は鹿児島、もう一人は東京に住んでいる。Aさんは鹿児島県阿久根生まれ、その後神戸に移り、高校まで過ごしていた。18歳のとき、大阪に出て、繊維卸問屋街にある連合事務所にタイピストとして就職した。社長との会話がとても勉強になり、印象深かったと言う。例えばお茶をどのように出すというような話は、その仕事を始めてから知ようになった知識で、仕事にやり甲斐を感じたと言う。男女共に働く意識があつた頃からあつたようである。その後、結婚が決まり、仕事を辞めた。結婚式は神戸で行われ、結婚後、故郷の阿久根に移り、一、二年間住んだが、23歳のとき、夫の仕事の関係で、思い切って東京に行くことにした。上京したときは、先のことをあまり心配せず、きっといい将来があると信じていた。神戸は比較的開放的な大都市だったため、東京に来て違和感を覚えなかった。五、六年経った後、甌島に行く話が出てきたのは夫の両親が里町にいたためである。大都会から小さい離島に来て、物質・情報豊かなモダンな世界から取り残されたと感じるよりもむしろ距離感が小さくなったと言う。ここ数十年、外から来た人が多く、彼らとコミュニケーションを交わすことで、外の世界との距離感が縮まり、世界が小さくなる。距離感というものは、人の心持次第だとAさんは言う。

Aさんは大きな都市での生活経験があるためか、人との交流に積極的で、前向きな印象が強かった。Aさん自身も「自分から進んで求めないと、何も得られない」という父親の教えを心に銘記していると言う。島に来て、その根源を崩さず、中心をしっかりと夫婦平等に、各自の好きなことを妨げないと夫と約束して実行してきた。Aさんは役場（福祉課）の手伝いをするともに、夫をサポートし、抵抗なく家事を担ってきた。余暇には、25歳から続けている趣味である絵画を楽しんでいる。今までに、甌島のスケッチ（祭、鹿の子ゆりなど）もたくさん描いてきた。

島に来たばかりの頃、価値観、習慣などに違和感を覚えた。昔は、企業や店がなかったし、専業主婦も少なかった。小さい村であるため、人と人の関わりが強く、皆助け合いながら生活してきたが、よそからの人は溶け込みにくい面もあった。しかし、怖さ知らずで、地元の行事、運動会、祭

りなどに参加していた。甌島には五つの集落があって、婦人会にも五つの支部があった。35歳の時婦人会に入り、60歳まで毎年会費を納めた。主な仕事は海岸清掃、国民年金の集金であった。その他に、地元の生活研究グループにも参加していた。これは、自然のものを加工して、より豊かで住みやすい食住環境を築くための、生活の改善を目指して、昭和42年からスタートした。時には鹿児島県本部に泊り込み、主に農産物の加工技術を学んで、自家生産物を有効に使い、食生活を豊かにしようとの目的を持つ農産物加工も盛んに行ってきた。よく作ったのは佃煮である。作った缶詰などは、毎年、ふるさとの日にグループが販売する。食以外にも、例えば、下甌の伝統織物ビーターナシなどにも日配りしつつ、生活に密着する活動を積み重ねてきた。

現在は、高齢化が進み、また都会から嫁いで来る女性が多くなり、悩みを抱えている人が多くいるので、婦人会の活動も難しくなっている。Aさんは「地方嫁」であり、当初は文化的な違いを感じていたものの、里町の空気が好きで、「住めば都」だと考え、自分から地元の組織の活動に参加し、だんだんと地域に溶け込み、受け入れられたと語った。

Bさんへの聞き取り

Bさんは鹿児島県の出身で、今年47歳、島に来て8年目である。夫は43歳で、漁師である。夫とは鹿児島で知り合って結婚した。娘が二人おり、長女は茨城県に住んでいる。次女は8歳で、小二である。里町に来る前は、鹿児島で働いていた。里町に来た当初、物価の高さ、就職口の少なさなど、不便なところを強く感じた。孤独感を覚えて毎日泣いていたが、小さい島で、周りが全部海で、逃げ出そうとしても、逃げ道が無くてしょうがないとあきらめたと言う。

Bさんは、島出身者同士の結婚はあまり多くなく、よそからの「地方嫁」が大部分であると言う。島の男の子は、中学校を卒業して本土に出て行っても、数年後に帰ってくる人が少なくないが、女の子は殆ど帰ってこない。「地方嫁」は、男が島外に出て仕事をしている時に知り合って、連れて帰ってきたケースが殆どである。その中には、青森県など東北地方出身者も何人かいるそうである。島の男たちは真面目でしっかりしていると、Bさ

んは高く評価している。島での生活ではつらい思いをしたことも多いが、夫はとても優しい人で、支えてくれた。なぜ女の子は出たまま帰ってこないかと尋ねると、島では就職できないからという理由が挙げられた。Bさんは薩摩川内市でパートをしていたが、去年やめて今は専業主婦である。

地域への溶け込みについては、難しい点が多く、「地方嫁」達は殆ど同じ考え方をもち、辛抱強くやってきたと語った。Bさんは島に友だちが少なく、普段あまり外に出ていない。地元のコミュニティへの参加も消極的である。里町の人々がみんな顔を知っている。何かあると、すぐ噂されるので、うるさいと思うこともある。そのため、Bさんは地域に溶け込めず、地域に受け入れられないという思いがある。しかし、この状況はこれから変わるかもしれないとも言う。今の生活に求めるものは何かと尋ねると、本土との交通を改善してほしいとのことだった。

Cさんへの聞き取り

Cさんは甌島出身で、婦人会元会長を務めていた。現在は、花屋を営んでいる。夫は里町の公務員で行政の仕事に就いている。

Cさんによると、今の婦人会は多くの問題を抱えていると言う。まず、財政が苦しくなっている。薩摩川内市として合併する前は、上から助成金をもらっていたが、合併後はだいぶ少なくなった。昔はゴミ袋を販売していたが、これは現在、衛生ごみ自治会が行なっている。主な活動は、毎月一回の海岸清掃、地元のボランティア活動などで、昔は非常に活躍していた。昭和30年代には、福祉、ごみ処理、子供教育などに関する研修会も行い、地域活動に貢献してきた。2004年に、婦人会を正式名称として「女性団体連絡協議会」に改名した。現在、婦人会活動の中心は、地域の女性への育児サポート、公民館のサポート（家庭教育について）、行政の手伝い、年金の集金などである。経費の減少のため、活動の規模は昔より小さくなっている。

もう一つの大きな問題は、今の女性たちは考え方が皆違うので、意見の統一が難しいことである。昔は、皆が地元出身で、お互いに助け合って活動をしていたが、今はよそからの嫁がほとんどで、考え方がいろいろである。自己を主張する若者も多く、役員になりたくないなど、婦人会活動に抵

抗を示す人もいる。昔は、婦人会への参加者は、既婚者のほぼ全員で400名近くいたが、今は少なくなった。

おわりに

以上の聞き取り調査を通して、今の「地方嫁」は昔の嫁より多くの悩みを抱えているようにみえた。AさんとBさんは二人とも「地方嫁」であるが、地域での生活に対する態度は異なる。Aさんは甌島が離島であるが、閉鎖的な空間と認識せず、人との交流を通して距離感がなくなると思っている。Bさんにとっては、島が「閉ざされた空間」としての意味合いを持っているといえよう。二人は違う世代の「地方嫁」で、個人の経験、島での生活期間の長さなど個人的事情や性格によるところもあるが、積極的に地域コミュニティに参加するほうが、地域に受け入れられやすいだろうと推測できる。その点から見ると、「地方嫁」と地元の人たち、若い世代と年配の世代の間の考え方の相違が問題の焦点になっている。相互理解の促進が、これからの婦人会及び地域コミュニティの重要な課題となると思われる。

また、就職が難しいという問題は、「地方嫁」を悩ませる問題の一つであるとともに、地元の女子が島外に出た後、再び里町に帰るかどうかの鍵であると言える。離島地域振興の推進に伴い、地域産業における就業人口が少しずつ増加する傾向を示している。しかしながら、女性のIターン、Uターンとの関係が深いと考えられる女性の就職へのサポートについては、未だに本格的な対策がとられていないというのが現実である。

一方、会員の減少が進んでいる婦人会の活性化は困難が伴っている。甌島では、全ての住民がお互いに顔見知りで、人と人との関係が濃い。そういう社会は人々を強く結びつけるとともに、人々の行動を制限する。そのため、そのような繋がり深い社会にただで、コミュニティに参加しなければならぬという認識と慣習は、人々が暗黙に共有している。社会の共通のルールに従わないと排除されるという傾向は、Bさんの話から多少窺える。Uターン、Iターンが多くなってきた今日、昔のようにすべての住民が一つの認識を持つわけではなくなっている。今までうまく機能してきた里地域のコミュニティが、大きな挑戦に面

している。婦人会は地域活動に欠かせない存在として位置付けられているのであるが、逆に地域社会からの期待、制約も大きい。地域団体はこの狭間で苦悩している。

参考文献と資料：

- 平岡昭利『離島研究』海青社 2003.6
- 『離島振興三十年史』第四編
- 離島実態調査委員会『離島—その現状と対策—』昭和41年3月31日
- 里役場企画課「2002里村村勢要覧」
- 「平成17年度里地域婦人会総会資料」